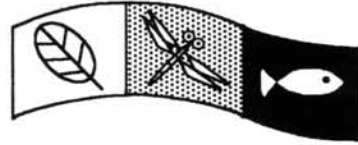


# Rio



リオ ~ 豊田市矢作川研究所 月報 ~ No. 18



矢作川の河原でよく見られるツマグロヒョウモン (メス)  
(1999年10月30日 田中 蕃 撮影)

## りゅういき太鼓体験録

芝村 龍太

地形の違いが、祭りで叩かれる太鼓のフォームの違いとなって現れる、といえは奇異に聞こえるだろうか。私の調査している愛知県稲武町稲橋地区の太鼓と岐阜県串原村の太鼓は、矢作川の下流から伝わった同じ系統の太鼓である。しかし、両者の太鼓のフォームは、さまざまなバリエーションを含みつつ、全体としてみればかなり異なるのだ。地形と太鼓のフォーム、この二つを結びつけるのは練り歩きの移動形態の違いである。

旧街道（現国道153号と257号）の交差する稲武町稲橋地区は、串原に比べ地形は平坦であり、太鼓を山車に載せて移動する。山車に据えられた稲武の太鼓は、打ち面がやや下向きで高い位置にあ

る。また、山車の後部に据えられるため、練り歩くときは進行方向に向かって太鼓を叩きながら進む。それに対して山がちな串原では、太鼓は天秤棒のような長さ3メートルほどの棒につるして移動する。棒につるされた串原の太鼓は、打ち面がやや上向きで低い位置にある。近年の太鼓の大型化に伴い、打ち面の中心はますます低くなる傾向にある。天秤棒に直交して太鼓をつるすため、打ち手は進行方向に対して横向きに太鼓を叩きながら移動する。

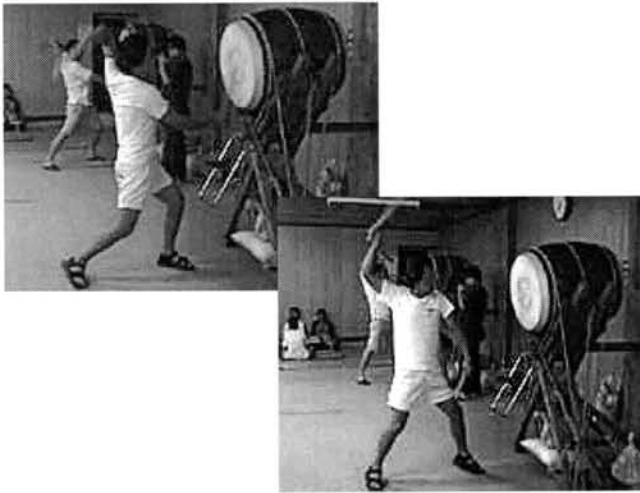
その結果、稲武では腰を軽く落とし、太鼓に対して正面気味に構える。空手などで言うところの猫足立ちに近い構えである。太鼓を叩きながら前

進するにはこの姿勢が叩きやすいのだ。その姿勢で仰ぎ見るようにして太鼓を叩く。そして右手で打つと同時に左手を後ろに跳ね上げ、太鼓を打つ合間に左手を大きくぐると回す（私はまだできない）。串原では中学校で全校生徒が保存会の太鼓を習うこともあり、フォームの統一が進んでいる。両足を広げて腰を低く落とし、低い位置にある太鼓に向かってバチを叩きおろすようにして打つ。稲武では正面気味に構えるのに対し、串原では太鼓に対して横向きに構える。両腕は肩より上に構

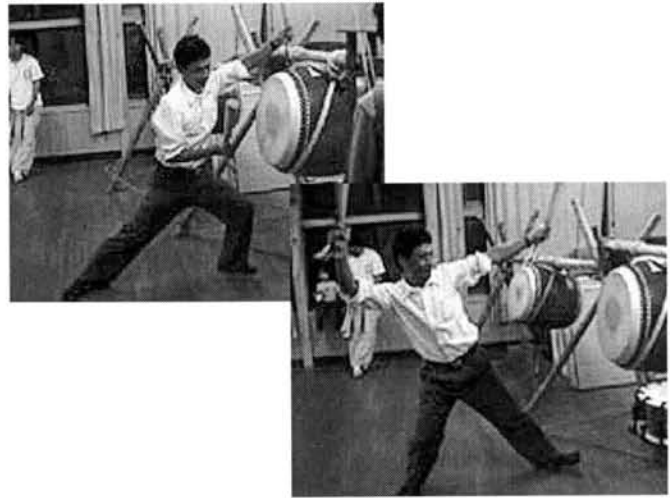
える。保存会では「両腕を耳につけるくらい」上げるよう指導しているが、観察していると野球というスリークォーターが多いようである。

稲武の人が串原の太鼓を、串原の人が稲武の太鼓を見れば、奇妙なフォームに見えるかもしれない。しかしそれはそれぞれの地域の事情に見合った叩き方なのだろう。

（しばむら りょうた、京都大学大学院文学研究科  
社会学専修 後期博士課程）



稲橋太鼓練習風景（1998年8月4日筆者撮影）



串原太鼓練習風景（1998年10月15日筆者撮影）

## 川に自由を戻せ

新見 幾男

1991年秋、豊田市の欧州近自然河川工法視察団が、ドナウ河右岸の支流やそのまた支流の枝川を見て回っていたときのことである。移動中のバスの中で、バイエルン州上級官吏で景観工学技術者のビンダーさんが、バイエルン州の河川改修工事の基本について、こう説明してくれた。

第1に、水が平常流されているところと、氾濫区域を合わせて、河川を見ること。

第2に、一次改修の目標は川を特定区域に閉じ込めることだったが、今は川に自由を戻すこと。

第3に、ダムなどで分断された川に、連続性を取り戻してやること。

第4に、川の風景や人間の利用を含め、川の個性を大切にすること。

ビンダーさんは「これを実現するには、大学で学んだ知識では足りない。技術者の再教育と経験の交流が要る」と言っていた。これらの基本にもとづく改修工事が、州政府の事業として着々と進

んでいたから、ドイツは本当の河川環境の先進国だと思った。

帰国後のことである。公民館講座などに呼ばれ、視察報告をして歩いた。ビンダーさんの4項目の車中説明のうちでは、2つ目の「川に自由を」という文学めいた表現が気に入っていたから、私はそこを特に吹聴した。

公民館講座などに出ている頃のことだが、私は生まれ在所の豊田市梅坪地区の小川を見て歩こうとしたことがある。梅坪は豊田都心の北に続く大農村集落だったが、副都心にしようという計画がまとまって、集落全面に及ぶ大規模な土地区画整理事業が10年余りも続き、ごく最近に事業が完了した。今の梅坪地区は、面積1.4km<sup>2</sup>、人口約7,700人である。

在所の川の惨状は知っているつもりだったが、歩いてみてあらためて驚いた。川がない。地下排水路と側溝に変わってしまったのだ。ほんのわず

かに地上に残った川も、ちゃちなコンクリート三面張りの排水路に変わっていた。子どもの遊べる小川は1メートルたりともない。その徹底ぶりに、あらためて驚いてしまったのだ。

私の記憶の中の在所の地図は、集落全体に網の目のように流れていた小川を基準に描かれていたようだ。その小川がすべて消え、新しい道路が縦横に建設されて、その上に家々のほとんどが建て替えられていたから、私の記憶は大混乱した。土地区画整理事業前と同じ位置にある国道、鉄道、矢作川と支流の堤防、神社、寺院、墓地などを基準点にして小川の位置を探ってみたが、無理だった。

目の前の現実の方が強い。現実が記憶と衝突したとき、現実が記憶を破壊しようとする。記憶の中の小川の地図が危ういものになるのを恐れ、私は在所の“小川探訪”を止めた。

昔々に地中に閉じ込められてしまった小川を地上に解放する公共事業が、ヨーロッパで大々的に始まったのと同じ時期に、私の在所では小川を地中にきれいさっぱり埋めてしまったのである。その計画段階から梅坪地区には大きな反対勢力があったが、工事は断行された。小川の地上への解放は、次の世代の工事になるように思われる。私の在所の“小川探訪”は失敗したが、記憶の中の地図がボケないうちに、また10年前の古い地図帳が処分されてしまう前に、新しい地図の上に、われわれがそこで育った小川の網の目を書き込んでおきたいと思う。

小川の話が長すぎた。豊田市内の矢作川本流は、河川改修工事が遅れたおかげで、兩岸に色濃く昔の風景を残している。すでに近自然時代を迎えているから、矢作川の兩岸がコンクリートで固められてしまうことはなさそうだ。今後の矢作川改修は、水辺の汀線に水制工（沈床）を設置したり、汀線の後背地の高水敷にコンクリートの“隠れ護岸”を埋め込むようなタイプの、近自然型で行われることになるだろう。小川の運命とは違って、矢作川の流れがコンクリートの中に閉じ込められてしまうことはなさそうなのだ。川の自由な流れが約束されているのだ。

しかし、今の矢作川は自由に流れる、自らの力を失っているように思う。私たちはここ十数年来、矢作川の奇妙な現象に悩まされている。川底にコンクリートが張られたわけではないのに、川底が大変に固くなった。その川底にカワシオグサだとかアオミドロだとか呼ばれる大型の糸状藻類が異

常繁殖する年が続いている。ごく近年には、コカナダモなどと呼ばれる水草の繁茂も始まった。ダム群の直下流を中心に、自然のうちに流路がほぼ固定されてきた。川のみおすじ（滯筋）が右に左に動くことがなくなった。大型の矢作ダムの建設（1971）以降、中小のダム群の直下流を中心に、川底の安定化がはじまったのだ。その過程で、アユを中心にした魚類があきらかに減り、その成長も悪くなったように思われる。

そういう現象に最初に気づいたのは、矢作川ふっその古川地区の川漁師たちだった。それ以来、私たちは「川の安定」が川の生物の生息環境を悪化させていると直感してきた。最近では、その現象が豊田市矢作川研究所の研究対象にもなってきた。

そんな矢先の今年6月30日に、何十年ぶりかの大洪水が起きた。出水が長く続いた。私たちはアユなどの魚類が下流へ流されてしまうような、大被害が起きるだろうと予想した。

やがて矢作川は平常の流量に戻った。エサを食べられず、やせ細ったアユが残っていた。みおすじが大きく動くほどではなかったが、砂利が大量に流れ込んでいた。川底の糸状藻類や水草は一掃されていた。8月中旬以降に、近年の矢作川には稀な、アユの大豊漁の日々が続いた。川底の異常以来アユがまったく釣れなかった区間でも、私の記憶では、十数年ぶりに豊漁だった。

昔から川漁師たちは「川は荒れなければ駄目になる」と言っていた。ダム群で洪水調節されるようになって以来、私たちはそういう実感を失っていたが、6・30大洪水は、野生生物の生息環境にとって“長期安定”が敵であることを思い出させてくれた。野生生物が環境の長期安定を嫌うのは、生物進化の過程で遺伝子に組み込まれた宿命なのだろう。私たちの“河川環境創造”の土木工事は、そのことを忘れていたように思われる。

「川に自由を戻す」という近自然河川工法の命題には、川に「洪水を起こす自由」を戻してやることを含めなければならないと思う。建設省がダムによる河川制御の行き過ぎを正すため、ダムのゲート開閉操作による人工洪水を研究しているが、それは、一連のダム群により流量を完全制御し河川利用率を50%にまで高めてしまった“人工水路・矢作川”においてこそ必要な、実験・研究だと思う。

（にいみ いくお、豊田市矢作川研究所  
事務局長・矢作川漁業協同組合 専務理事）

